

父親の育児不安に関する基礎的研究Ⅳ

—父親の育児不安尺度の作成に向けて：対象者の属性や育児困難感発生関連要因の検討—

愛育相談所 安藤朗子・平岡雪雄・武島春乃・庄司順一
客員研究員 川井 尚・中村 敬
愛知教育大学 恒次欽也
愛育幼稚園 酒井幸子
愛育ナーサリールーム 山川美恵子
愛育病院心理福祉室 小玉夕香・堤道子・宮澤理恵
あんクリニック 永井桃子
東邦大学医療センター大橋病院 鈴木眞弓
(株) 保健同人社 加来華誉子
嘱託研究員 渡邊寛・鈴木玲子(彩の子ネットワーク)・大藪泰(早稲田大学)
馬岡清人(埼玉工業大学)・島智久(浦安市教育委員会)
伊藤嘉余子(埼玉大学)・山岡テイ(情報教育研究所)
木邨真美(大阪府衛生会附属診療所)・古賀浩子(名古屋大学)
栗原佳代子(東京大学)

要 約

今年度は、1) 父親及び母親の属性と育児困難感との関連についての分析、2) 母親の育児困難感の発生関連要因に関する分析、3) 父親ならびに母親の育児不安尺度（スクリーニング版）の作成に向けて、因子分析による項目の抽出ならびに内的整合性、信頼性分析等を行うことを目的とした。研究対象は、0歳～7歳未満の子どもをもつ父親と母親のペア1900組である。実施した質問紙は、育児や母親/妻（父親/夫）、家族、自身の心身状態などについての7領域から成る。分析方法は、目的1) に対しては χ^2 検定、平均値の差の検定等を、2) に対しては、重回帰分析等を行った。主な結果及び考察は、1) 子どもの数が1人よりも2人の方が、両親ともに育児困難感をより強く抱いていた。2) 子どもの異常及び母親（妻）の周産期の異常は、母親及び父親のメンタルヘルス、さらには育児や夫婦関係、家庭の状態、などへさまざまなマイナスの影響を与える可能性が示された。3) 育児困難感を軽減するためには、子育てに悩んだときに相談する人がいることや子どもの遊び相手など父親が子どもによくかかわることが、母親のみならず父親にとっても重要と考えられた。4) 母親の育児困難感の発生関連要因として、「母親の不安・抑うつ状態」と「夫婦関係のあり方」が見いだされた。前者は、父親と母親の共通するところであるが、父親はこれだけが関連要因であったのに対し、母親のみに後者の夫婦関係による要因が見いだされた。これは父親と母親それぞれの育児不安心性の特徴及びそれらへ影響を与える関連要因が各々独自のものであるという推測を検証することができた。5) 上記分析に基づいて育児支援のための育児不安尺度（スクリーニング版）の試案を作成した。これらの結果を踏まえ、来年度は、父親ならびに母親の育児不安尺度（スクリーニング版）の臨床的妥当性の検討や正式版の作成を行う予定である。

キーワード：育児不安、育児困難感発生関連要因、父親、母親、属性、夫婦関係、スクリーニング版

A Fundamental Study on Child-Rearing Anxiety of Fathers IV : Analyzing the parents' attribution and the factors related to the feeling of difficulty with child-rearing

Akiko ANDO, Yukio HIRAOKA, Hisashi KAWAI, Haruno TAKESHIMA, Junichi SHOJI, Takashi NAKAMURA, Kinya TUNETUGU, Sachiko SAKAI, Mieko YAMAKAWA, Yuka KODAMA, Michiko TUTUMI, Rie MIYAZAWA, Momoko NAGAI, Mayumi SUZUKI, Kayoko KAKU, Yutaka WATANABE, Reiko SUZUKI, Yasushi OYOYABU, Kiyoto UMAOKA, Tomohisa SHIMA, Kayoko ITO, Tei YAMAOKA, Mami KIMURA, Hiroko KOGA, Kayoko KURIHARA

Abstract: The purposes of this study were 1) to analyze between parents' attribution and their feelings of difficulty with child-rearing, 2) to examine the factors related to the feeling of difficulty with child-rearing for mothers, and 3) to pick up the items to measure the child-rearing anxiety for a screening edition by factor analysis. 1,900 pairs of parents with 0- 6years old children were the subjects to this study. A questionnaire consisted of 7 fields, related to the child-rearing, mother/wife (father/husband), family, own mind-and-body condition etc. The results were summarized as follows; 1) both fathers and mothers who had two children felt the feeling of difficulty with child-rearing much stronger than the parents with only a child, 2) both parents who have children with disorder and perinatal abnormalities adversely affected their mental health, child-rearing, marital relationship, home condition, and so forth variously, 3) it was important for not only mothers but also for fathers to have someone to talk with about the child-rearing, and that father plays with and care for his child a lot in relieving the feeling of difficulty with child-rearing, 4) the factors related to the feeling of difficulty with child-rearing of mother were "mother's feelings of anxiety or depressive state" and "marital relationship". The former was a common factor for the couples the latter was only seen as a factor among mothers. Therefore we proved that fathers and mothers had the distinctive features respectively about child-rearing anxiety and the factors relevant to it, 5) we tried to make up the scale of child-rearing anxiety (a screening edition) based on the above findings. In the next year study, we will examine the clinical adequacy of this scale, and make up the official edition.

Keywords : Child-rearing anxiety, The factors related to the feeling of difficulty with child-rearing, Father, Mother, Parent's attribution, Marital relationship, Scale for a screening edition

I. 研究目的

平成19年、20年度の研究より、父親にも育児への「自信のなさ・心配・困惑・父親としての不適格感」(育児困難感タイプI)、子どもへの「ネガティブな感情・攻撃・衝動性」(育児困難感タイプII)と名づけられる育児不安心性が認められ、これらは相互に影響を与えていることが明らかにされた。また、これら育児不安心性への影響因子として「父親の不安・抑うつ状態」が見いだされた。タイプIIは、父親の育児不安そのものが虐待へのハイリスク要因であると考えられた。

昨年度の研究からは、父親版で二つに分かれていた育児困難感が、母親版では一つにまとまった因子として抽出され、父親版にはない「夫婦関係のあり方」という新たな因子が登場し、父親と母親それぞれの育児不安心性の特徴、及びそれらへ影響を与える関連要因は独自であることが推測された。

これらの経緯を踏まえ、今年度は、1) 昨年度課題として出された父親及び母親の属性と育児困難感との関連についてさらに分析を加えること、2) 母親の育児困難感の発生関連要因に関して父親版と同様の分析を行うこと、3) さらに父親ならびに母親の育児不安尺度(スクリーニング版)の作成に向けて、因子分析による項目の抽出並びに内的整合性、信頼性分析等を行うことを目的とした。

II. 研究方法

1. 対象: 0歳～7歳未満の子どもをもつ父親と母親を対象とした。質問紙の配布数は3845件、内両親のペアがそろっている分析有効対象数は、1900組(有効回収率49.4%)であった。

2. 方法: 質問紙調査を行った。質問紙は、領域I:育児に関する項目、領域II:妻に関する項目、領域III:家族に関する項目、領域IV:父親自身の心身状態に関する項目、領域V:妻の心身状態に関する項目、領域VI:乳児期に関する項目、領域VII:各年齢時期の子どもの心身状態に関する項目から成る。

3. 分析方法:

1. 属性と育児困難感との関連を χ^2 検定、平均値の差の検定、分散分析等により行った。

2. 母親の育児不安及びその発生関連要因のさらなる解明のために重回帰分析等により育児困難感に関連する要因がどのようなものか等の検討や父親版の結果と比較検討した。

3. 父親ならびに母親の育児不安尺度(スクリーニング版)の作成(試案)については、上に述べた属性と育児困難感との関係、ならびに母親の重回帰分析、同父親、並びに因子分析の結果(重回帰分析によって育児困難感に影響を与えている因子から因子得点の高い項目を上位5項目まで選択する。)に基づいて項目を作成し、育児支援スクリーニング版として試案を

作成した。

4. 倫理的配慮

本調査の実施に当たっては、各地域の小児科、幼稚園、保育所、子育てグループの責任者、及び調査対象である父親、母親に対し本研究の目的、研究方法の他、無記名回答であること、回答拒否が自由であること、個人情報保護のための配慮がなされること、回答をもって本研究に同意したことになること、本研究の目的以外にデータを使用しないことなどを依頼文書及び質問調査票に明記した。

また、研究計画の段階で、日本子ども家庭総合研究所・研究倫理委員会に審査を求め承認を得た。

III. 研究結果

1. 属性と父親及び母親の因子得点との関連について

(1) 子どもの年齢別(第1子の年齢0～6歳)(表1参照)

子どもの年齢別及び子どもの人数をクロス集計した結果を表1に示した。

子どもの人数2人の群が最も多いが、第1子の年齢別にみると、子ども2人の群には、分布に偏りがあるため、子どもの年齢によって因子得点に差があるかどうかの検討は、子どもの人数が1人の群に限って行った。その結果、有意差が認められた因子は次の通りであった。

なお、平均値は、全ての因子で得点が高い方がネガティブな反応であることを示している。

表1. 第1子の年齢と子どもの人数のクロス集計表

年齢 人数	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	計
1人	27	71	68	49	77	87	72	451
2人	5	3	14	51	132	208	197	610
3人	0	1	1	2	9	32	39	84
4人	0	0	0	0	1	2	2	5
5人	0	0	0	0	0	4	0	4
6人	0	0	0	0	0	0	5	5
計	32	75	83	102	219	333	315	1159

1) 父親

① 第4因子「Difficult Baby」

- ・1歳(平均値18.2/SD6.8:以下数値のみ表記)と5歳(14.5/5.8) $P=0.003$, 6歳(14.7/5.2) $P=0.012$ の間
- ・2歳(17.7/5.9)と5歳(14.5/5.8) $P=0.025$ の間

2) 母親

① 第1因子「夫・父親・家庭機能の問題」

- ・2歳(45.7/11.0)と5歳(54.0/17.6) $P=0.049$ の間

② 第6因子「夫婦関係のあり方」

- ・1歳(27.6/7.2)と5歳(32.1/9.7) $P=0.034$ の間

③ 第7因子「自分自身の親子関係」

- ・2歳(7.5/2.9)と5歳(9.3/3.9) $P=0.029$ の間
- ・5歳(9.3/3.9)と6歳(7.5/3.0)と $P=0.018$ の間

(2) 子どもの人数別 (表1参照)

子どもの人数によって有意差が認められた因子は、次の通りであった。

1) 父親

① 第4因子「Difficult Baby」

- ・1人 (16.2/6.1) と 2人 (14.9/5.7) $P=.001$, 3人 (13.6/5.3) $P=.000$ の間
- ・2人 (14.9/5.7) と 3人 (13.6/5.3) $P=.004$ の間

② 第6因子「育児困難感タイプⅡ」

- ・1人 (10.0/3.2) と 2人 (11.0/3.6) $P=.000$, 3人 (11.2/3.8) $P=.000$, 4人 (12.2/4.0) $P=.002$ の間

③ 第7因子「自分自身の親子関係」

- ・1人 (8.3/3.1) と 4人 (10.2/3.9) $P=.017$ の間

2) 母親

① 第4因子「育児困難感」

- ・1人 (53.4/14.3) と 2人 (56.5/14.7) $P=.004$ の間

② 第5因子「Difficult Baby」

- ・1人 (17.5/6.7) と 2人 (14.8/6.1) $P=.000$, 3人 (13.8/5.5) $P=.000$ の間

(3) 新生児期あるいは生後1か月以降に子どもに異常がなかった群とあった群の比較 (表2参照)

新生児期あるいは生後1か月以降に子どもに何らかの異常がなかった群とあった群の人数及び割合は表2の通りである。

表2 子どもの異常

	人数	%
異常はなかった	1698	90.4
異常があった	180	9.6
合計	1878	100.0

子どもに異常があったか否かで有意差が認められた因子は以下の通りであった。

1) 父親

① 第1因子「妻の不安・抑うつ状態」

- 異常なし (43.5/13.7)
- 異常あり (47.2/13.9) $P=.001$

② 第5因子「育児困難感タイプⅠ」

- 異常なし (13.2/4.5)
- 異常あり (14.0/4.5) $P=.040$

③ 第6因子「育児困難感タイプⅡ」

- 異常なし (10.8/3.6)
- 異常あり (11.3/3.5) $P=.043$

2) 母親

① 第1因子「夫・父親・家庭機能の問題」

- 異常なし (51.4/16.4)
- 異常あり (55.0/17.3) $P=.007$

② 第2因子「母親の不安・抑うつ状態」

- 異常なし (50.0/15.5)
- 異常あり (54.9/16.2) $P=.003$

③ 第4因子「育児困難感」

- 異常なし (55.0/14.5)
- 異常あり (59.8/14.5) $P=.000$

④ 第6因子「夫婦関係のあり方」

- 異常なし (30.6/8.4)
- 異常あり (32.2/8.6) $P=.023$

⑤ 第7因子「自分自身の親子関係」

- 異常なし (8.2/3.3)
- 異常あり (9.0/3.5) $P=.005$

(4) 母親(妻)の周産期(妊娠中・分娩中・産褥期)に異常のなかった群とあった群の比較 (表3参照)

母親の妊娠中, 分娩中, 産褥期のいずれかで異常がなかった群とあった群の人数とその割合を表3に示した。

表3 周産期の異常

	人数	%
異常はなかった	1433	76.6
異常があった	438	23.4
合計	1871	100.0

周産期に異常があったか否かで有意な差が認められた因子は以下の通りであった。

1) 父親

① 第1因子「妻の不安・抑うつ状態」

- 異常なし (43.1/13.6)
- 異常あり (46.3/14.2) $P=.000$

② 第2因子「父親の不安・抑うつ状態」

- 異常なし (38.6/12.8)
- 異常あり (41.2/13.3) $P=.000$

③ 第3因子「妻・母親・家庭機能の問題」

- 異常なし (26.3/8.2)
- 異常あり (27.2/8.6) $P=.035$

④ 第4因子「Difficult Baby」

- 異常なし (14.7/5.7)
- 異常あり (15.7/6.2) $P=.006$

⑤ 第5因子「育児困難感タイプⅠ」

- 異常なし (13.2/4.5)
- 異常あり (13.7/4.8) $P=.024$

2) 母親

① 第1因子「夫・父親・家庭機能の問題」

- 異常なし (50.8/16.3)
- 異常あり (54.4/16.9) $P=.000$

② 第2因子「母親の不安・抑うつ状態」

- 異常なし (50.3/15.2)
- 異常あり (54.8/17.0) $P=.000$

③ 第3因子「夫(父親)の不安・抑うつ状態」

- 異常なし (38.5/11.9)
- 異常あり (41.7/12.7) $P=.000$

④ 第4因子「育児困難感」

- 異常なし (54.5/14.2)

異常あり (58.5/15.2) P=.000

⑤ 第6因子「夫婦関係のあり方」

異常なし (30.3/8.5)

異常あり (32.0/8.3) P=.000

(5) 母親が無職群(主婦・休職中)と有職群(フルタイム・パート・自営)の比較(表4参照)

母親が、主婦及び休職中を無職群、フルタイム、パート、自営で働いている場合を有職群として、人数とその割合を表4に示した。

昨年度は、質問紙の7つの領域の各項目について、無職群と有職群の比較を行った。今回は、各因子得点に差があるかどうかの検討を行った。有意差が認められた因子は次の通りであった。

表4 母親の無職及び有職の割合

	人数	%
無職(主婦・休職中)	1315	71.9
有職(フルタイム・パート・自営)	514	28.1
合計	1829	100.0

1) 父親

有意差の認められた因子はなかった。

2) 母親

① 第1因子「夫・父親・家庭機能の問題」

無職群 (51.2/16.3)

有職群 (53.3/17.0) P=.016

② 第2因子「母親の不安・抑うつ状態」

無職群 (50.6/15.5)

有職群 (53.0/15.9) P=.005

③ 第3因子「夫(父親)の不安・抑うつ状態」

無職群 (38.9/12.1)

有職群 (40.3/12.3) P=.030

④ 第6因子「夫婦関係のあり方」

無職群 (30.4/8.3)

有職群 (31.8/8.7) P=.003

(6) 昼間の養育者が母親(幼稚園を含む)群と保育所群の比較(表5参照)

昼間の養育者の内訳は、表5の通りであった。祖父母とその他の人数がかなり小さいため、ここでは、昼間の養育者が母親である場合と保育所の場合の2群の比較を行った。

その結果、2群間に有意差の認められた因子は、次の通りであった。

表5 昼間の養育者の割合

養育者	人数	%
母親(幼稚園含む)	1633	86.4
保育所	230	12.2
祖父母	23	1.2
その他	5	0.3
計	1891	100.0

1) 父親

① 第3因子「妻・母親・家庭機能の問題」

母親(幼稚園含む)群 (26.2/8.1)

保育所群 (28.1/9.4) P=.004

2) 母親

① 第6因子「夫婦関係のあり方」

母親(幼稚園含む)群 (30.5/8.3)

保育所群 (31.9/9.2) P=.041

(7) 単一項目と「育児困難感」因子得点との関係

A) 「子育てに悩んだ時に相談できる人がいる」

近年、子育て中の親の孤立化が問題にされることが多いため、子育てに悩んだ時に相談できる人がいるかどうかという質問項目に対する回答(「はい」、「ややはい」、「ややいいえ」、「いいえ」)別に、育児困難感因子との関連を検討した。

有意差が認められたのは、次の通りであった。

1) 父親

① 第5因子「育児困難感タイプI」

・「はい」(N=841) (11.9/4.0) と「ややはい」(N=443) (13.9/4.1) P=.000, 「ややいいえ」(N=277) (15.1/4.2) P=.000, 「いいえ」(N=305) (14.7/5.6) P=.000の間
・「ややはい」(N=443) (13.9/4.1) と「ややいいえ」(N=277) (15.1/4.2) P=.002の間

② 第6因子「育児困難感タイプII」

・「はい」(N=842) (10.0/3.1) と「ややはい」(N=450) (11.2/3.5) P=.000, 「ややいいえ」(N=278) (11.7/3.8) P=.000, 「いいえ」(N=305) (11.5/4.2) P=.000の間

2) 母親

① 第4因子「育児困難感」

・「はい」(N=1400) (53.0/13.5) と「ややはい」(N=288) (62.3/13.9) P=.000, 「ややいいえ」(N=74) (69.2/14.8) P=.000, 「いいえ」(N=48) (64.1/19.6) P=.000の間
・「ややはい」(N=288) (62.3/13.9) と「ややいいえ」(N=74) (69.2/14.8) P=.001の間

B) 「夫は子どもとよく遊び、面倒見がよい」

父親の子どもへの関わりの程度と母親の育児困難感との関連を検討するため、父親の関わりの程度をある程度推測できると思われる本項目の回答(「はい」、「ややはい」、「ややいいえ」、「いいえ」)別に、母親の第4因子「育児困難感」の因子得点との関連をみた。

なお、参考のために、母親の評価する父親の子どもへの関わりの程度と父親自身の育児困難感との関連についても検討した。

有意差が認められたのは、次の通りであった。

1) 母親

① 第4因子「育児困難感」

・「はい」(N=869) (53.0/14.2) と「ややはい」(N=559) (56.0/14.0) P=.001, 「ややいいえ」(N=275) (60.4/14.3) P=.000, 「いいえ」(N=108) (59.6/16.3) P=.000の間

・「ややはい」(N=559) (56.0/14.0) と「ややいいえ」(N=275) (60.4/14.3) $P=.000$ の間

2) 父親

① 第5因子「育児困難感タイプⅠ」

・「はい」(N=907) (12.4/4.2) と「ややはい」(N=572) (13.6/4.5) $P=.000$, 「ややいいえ」(N=285) (14.6/4.9) $P=.000$, 「いいえ」(N=106) (15.5/5.0) $P=.000$ の間

・「ややはい」(N=572) (13.6/4.5) と「ややいいえ」(N=285) (14.6/4.9) $P=.006$, 「いいえ」(N=106) (15.5/5.0) $P=.000$ の間

② 第6因子「育児困難感タイプⅡ」

・「はい」(N=911) (10.2/3.3) と「ややはい」(N=576) (11.0/3.5) $P=.000$, 「ややいいえ」(N=285) (11.7/3.9) $P=.000$, 「いいえ」(N=107) (12.1/4.2) $P=.000$ の間

・「ややはい」(N=576) (11.0/3.5) と「いいえ」(N=107) (12.1/4.2) $P=.017$ の間

2. 重回帰分析による母親の育児困難感に影響を与える要因 (表7, 表8参照)

第4因子の育児困難感を従属変数, 他の6個の因子を独立変数として重回帰分析を行った。

その結果, 相関比は.700 (調整済み.699) で比較的高い結果を得た。育児困難感の関連要因としては第2因子の母親の不安・抑うつ状態が標準化係数で.650 と最も高く, 次いで第6因子の夫婦関係のあり方.404 であった。

平成20年度に行った父親版の重回帰分析では, 育児困難感タイプⅠ, Ⅱに分かれていて (安藤ほか, 2008), タイプⅠでは育児困難感タイプⅡ, 父親の不安・抑うつ状態, の順で後の因子は係数.1未満であり, タイプⅡでは育児困難感Ⅰ, 父親の不安・抑うつ状態, の順であった。

母親版では父親版と同様に自身の不安・抑うつ状態, そして父親版では因子に抽出がなかった夫婦関係のあり方が要因として挙がってきた点において大きな相違が生じた。

妻にとっては自身の心身状態が育児困難感に大きく影響を与えると共に夫婦関係のあり方が重要であることがよくわかる。

このことから妻の場合は夫婦関係が子育てにおいて重視されていることが推測される点で重要な知見である。そして, また, この夫婦関係のあり方が妻自身の心身状態に影響を与えられるのでこの両要因は一体的に育児困難感に影響を与えていると考えられる。

他方, 夫側は夫婦関係要因が挙がってこなかった点において, 夫の育児困難感はずねに自身の心身状態に左右されるという点で重要な知見ともいえる。

3. 父親ならびに母親の育児不安尺度 (スクリーニング版) (試案) の作成 (資料参照)

1. 育児困難感に関わるフェースシート

上記で述べたように父親版, 母親版ともに子どもの人数が1人のときに育児困難感は低く, 子どもの異常や母親が

周産期に異常がある場合に育児困難感が高い。

2. 項目間との関係から

子育てに悩んだときに相談できる人がいる, 夫は子どもとよく遊び面倒見がよい, この2項目がそれぞれポジティブなほど育児困難感低い傾向がある。

3. 育児困難感に影響を与える要因から

父親版では「父親の不安・抑うつ状態」因子, 母親版では「母親の不安・抑うつ状態」と「夫婦関係のあり方」の2因子が関与していることがわかった。そこで, この因子を構成する項目群のうち因子得点上位5位の項目を採り入れることにした。その結果,

父親版:

・育児困難感タイプⅠ

父Ⅱ 育児: 2子どものことでどうしたらよいかわからない

父Ⅱ 育児: 1育児に自信が持てない

父Ⅱ 育児: 4どのようにしつければよいかわからない

父Ⅱ 育児: 6子育てに困難を感じる

父Ⅱ 育児: 5父親として不適格と感じる

クロンバックの信頼性分析で.859 と高い値が得られた。内的整合性は各領域の項目の合計点と各項目とのピアソン相関係数である。以下同じで, ここでは.782 から.857 と高い値が得られた。

・育児困難感タイプⅡ

父Ⅱ 育児: 14とめどなく叱ってしまう

父Ⅱ 育児: 13子どもは何で叱られているかわからないのに叱ってしまう

父Ⅱ 育児: 12子どもに八つ当たりしては反省して落ち込む

父Ⅱ 育児: 15子どものことを許せない

父Ⅱ 育児: 10子どもを虐待しているのではないかと思う

クロンバックの信頼性分析で.736 とある程度高い値が得られた。内的整合性は.559 から.781 と高い値が得られた。

・父親自身の不安・抑うつ状態

父Ⅳ 自身: 5精神的に不調である

父Ⅳ 自身: 13沈みがち

父Ⅳ 自身: 2不安や恐怖感におそわれる

父Ⅳ 自身: 3悲観的になりやすい

父Ⅳ 自身: 1気が滅入る

クロンバックの信頼性分析で.908 と高い値が得られた。内的整合性は.847 から.864 と高い値が得られた。

・夫婦関係のあり方

なお, 下記の夫婦関係は父親版では得られなかったものであるけれども母親とのペア比較を考慮に入れて加えたものである。

父Ⅱ 妻: 8妻と気持ちが通じ合っている

父Ⅲ 家族: 1家族としてのまとまりを感じる

父Ⅴ 妻: 24妻が落ち込んだ時に話し相手になり, 話をよく聴く

父Ⅴ 妻: 25妻が子育てに悩んでいるときは精神的に支

えるようにしている

父 I4 自身：24 男として家族を守り支えとなっている

クロンバックの信頼性分析で.803 と十分な値が得られた。従って信頼性分析では高い結果が得られたのでこの領域として得点化することは問題がないと考える。

内的整合性は.688 から.785 と高い値が得られた。

母親版

・育児困難感タイプ I (タイプ I と称しているが母親版では育児困難感はこの 1 種のみである。整合性のためにタイプ I とした)

母 I1 育児：1 育児に自信が持てない

母 I1 育児：5 母親として不適格と感じる

母 I1 育児：2 子どものことでどうしたらよいかわからない

母 I1 育児：4 どのようにしついたらよいかわからない

母 I1 育児：6 子育てに困難を感じる

クロンバックの信頼性分析で.879 と高い値が得られた。

内的整合性は.782 から.857 と高い値が得られた。

・育児困難感タイプ II

なお、下記の父親版の育児困難感タイプ II は母親版では得られなかったものであるけれども父親とのペア比較を考慮に入れて加えたものである。

母 I1 育児：14 とめどなく叱ってしまう

母 I1 育児：13 子どもは何で叱られているかわからないのに叱ってしまう

母 I1 育児：12 子どもに八つ当たりしては反省して落ち込む

母 I1 育児：15 子どものことを許せない

母 I1 育児：10 子どもを虐待しているのではないかと思う

クロンバックの信頼性分析で.795 とある程度高い値が得られた。このように信頼性分析では高い結果が得られたのでこの領域として得点化することは問題がないと考える。内的整合性は.629 から.798 と高い値が得られた。

・母親自身の不安・抑うつ状態

母 I4 自身：5 精神的に不調である

母 I4 自身：13 沈みがち

母 I4 自身：2 不安や恐怖感におそわれる

母 I4 自身：3 悲観的になりやすい

母 I4 自身：1 気が滅入る

クロンバックの信頼性分析で.908 と高い値が得られた。

内的整合性は.846 から.876 と高い値が得られた。

・夫婦関係のあり方

母 I2 夫：8 夫と気持ちが通じ合っている

母 I3 家族：1 家族としてのまとまりを感じる

母 I5 夫：24 夫が落ち込んだ時に話し相手になり、話をよく聴く

母 I5 夫：25 夫が子育てに悩んでいるときは精神的に支えるようにしている

母 I4 自身：24 女として家族を守り支えとなっている

クロンバックの信頼性分析で.794 と十分な値が得られ

た。内的整合性は.578 から.787 と高い値が得られた。

以上のような項目群でスクリーニング版の試案を作成した。フェースシートに関わる 2 項目は育児困難感の高低に影響を与えるものであり、この情報は有用である。また、相談相手の有無、夫の子どもとの遊びの程度はともに、育児困難感に影響を与えるものとして質問項目群に加えることとした。父親版と母親版の相違は領域数の違いである。ただ、父親版も母親版と同じ項目構成にすることにより夫婦間の異同を検討することができるので、今回の試案版は同一項目で統一することにした。

この結果、育児困難感は 2 領域 10 項目、その他 2 領域 10 項目、さらに相談相手の有無、夫の子どもとの遊びの程度 2 項目で質問項目は 22 項目となる。これにいくつかのフェースシートを加えた構成となる。なお、この試案はその有効性を示す信頼性に関しては上記のようにクロンバックの信頼性分析、内的整合性の分析では問題がなく、また、もともと因子分析から項目を選択したので因子的妥当性はあると考えて良いと思う。

IV. 考察

1. 属性と父親及び母親の因子得点との関連について

(1) 子どもの年齢(第1子の年齢0~6歳別)との関連

子どもの人数が1人である親を対象に分析をした結果、父親と母親で共通した差は認められなかった。

父親は、第4因子「Difficult Baby」において、1, 2歳の親と5, 6歳の親の評価に差がみられ、「夜泣きがひどい」「一晩に何度も起こされる(起こされた)」「おとなしく手がかからない」などの乳児期の様子について、1, 2歳児の親の方が5, 6歳児の親よりもネガティブに評価していることがわかった。このことから、養育中の子どもの年齢が乳児期に近いほどネガティブな印象が反映されやすいことが推察された。

母親は、第1因子「夫・父親・家庭機能の問題」、第6因子「夫婦関係のあり方」、第7因子「自分自身の親子関係」において、1歳児あるいは2歳児と比べ、5歳児をもつ母親が有意にネガティブであったが、その解釈については、今回の分析結果だけでは不明である。

今回は、子どもの人数が1人である親に限った分析であり、分析対象人数も十分ではなかったため、子どもの年齢による違いについては、今後の課題としたい。

(2) 子どもの人数との関連

両親共通して、乳児期の子どもの評価は、1人の方が2人及び3人よりもネガティブであった。子どもの数が複数になると比較の対象ができ、乳児期の評価が緩和される傾向があるのかもしれない。

父親については、1人よりも2人、3人、4人と数が増えるほど育児困難感タイプIIの子どもへのネガティブな感情・攻撃・衝動性を抱いているという結果がみられたこと

が目される。一方、母親は、子どもの人数が1人よりも2人の母親の方が育児困難感をより強く抱いていた。

これらのことから、子どもの数は、1人よりも2人の方が育児困難感をより強くもつという推測は両親共通して支持されたが、子どもの数が3人、4人と多い方がより困難感を抱きやすいということは父親にのみ認められ、多子家庭において父子関係に留意する必要性が示唆された。

(3) 子どもに新生児期あるいは生後1か月以降に異常があった群となかった群との比較

両親ともに子どもに異常があった場合には、育児困難感をより強く抱くことが明らかにされた。

父親は、育児困難感のタイプI及びタイプIIの両方においてよりネガティブな特徴がみられた。タイプIIは、子どもへのネガティブな感情・攻撃・衝動性であり、子どもの障害と父親の不適切な育児との関連性が危惧される。また、父親から見て、母親の不安や抑うつ状態の評価がよりネガティブなものであり、母親自身も自分の不安や抑うつ状態の評価がネガティブであった。

さらに母親は、「夫・父親・家庭機能の問題」や「夫婦関係のあり方」もよりネガティブにとらえていた。子どもに異常があることで母親の不安や抑うつが高まることは予測されたことであったが、その際に母親の精神的な支援者となるべき父親(夫)との関係が、異常のなかった群よりもネガティブであったことは、気付きな結果と考える。

(4) 母親(妻)の周産期(妊娠中・分娩中・産褥期)に異常のあった群となかった群との比較

母親(妻)の周産期に異常があった場合には、両親ともに育児困難感をはじめさまざまな因子との関連が認められた。

特に母親自身のみならず、父親自身の不安・抑うつ状態への影響が大きいことは特筆すべきことである。「父親の不安・抑うつ状態」は、平成20年度の本研究において父親の育児困難感の発生関連要因の第1番目の因子として見出された。したがって、母親(妻)の周産期の異常が、母親及び父親のメンタルヘルス、さらに育児や夫婦関係など家庭全体に大きな影響を与える可能性が示唆され、育児支援を要する父親をスクリーニングする際の1つの指標となるのではないかと考える。

(5) 母親が無職群(主婦・休職中)と有職群(フルタイム・パート・自営)の比較

父親には有意な差は認められなかった。しかし、母親には、第1因子「夫・父親・家庭機能の問題」、第2因子「母親の不安・抑うつ状態」、第3因子「夫(父親)の不安・抑うつ状態」、第6因子「夫婦関係のあり方」の4つの因子に、有職群が無職群よりもネガティブな回答が多いという差が認められた。育児困難感においては差が認められない点も含め、差がみられた因子の内容は、領域別の項目ごとに検討した結果と一致するものであった。

近年、男女共同参画社会が推進され、有職の母親が増えている中、本研究においては、両親が共働き家庭では、特

に母親の精神的な余裕のなさや夫婦関係をネガティブに捉えている特徴が明らかとなった。しかし、両親が共働きであるか否かの要因が育児にどのような影響を及ぼしているかの検討は、勤務条件(勤務時間や通勤時間等)、経済状態、子どもの年齢や人数などの要因を絡めた分析が必要であろう。今後の課題として、有職群と無職群の人数をそろえて比較すると同時に上記の要因を含めた検討をする必要があると考える。

(6) 昼間の養育者が母親(幼稚園を含む)と保育所の比較

父親は、(5) 母親が無職群と有職群の比較では有意差はみられなかったが、昼間の養育が保育所の群の方が母親(幼稚園を含む)群よりも第3因子「妻・母親・家庭機能の問題」の評価が有意にネガティブであるという差がみられた。表6は、母親の職業と昼間の養育者(2群)のクロス集計である。昼間の養育が母親の場合の特徴は、主婦の占める割合が高く、保育所の場合には、フルタイムで働いている母親の占める割合が高いことがわかる。すなわち、ここでみられた有意差には、フルタイムの仕事をもつ母親(妻)群とそうでない群の差異が反映されている可能性があると考えられる。

父親の第3因子「妻・母親・家庭機能の問題」を構成する項目をみると、「妻は精神的に私を支えてくれる」「この人と結婚して幸せである」「妻と気持ちが通じ合っている」などの妻との関係や「母親としての自覚が足りない」「妻は子どもとよく遊び、面倒見がよい」などの母親としての役割、「家族のなかで私だけが辛い思いをしている」「家庭には私の居場所がない」などの家庭機能の問題から構成されている。

表6 母親の職業と昼間の養育者のクロス集計

単位：人数と% (各職業の中で占める割合)

昼間の養育 母親の職業	母親 (幼稚園含)		保育所		合計	
	人数	%	人数	%	人数	%
主婦	1259	98.6	18	1.4	1277	100
フルタイム	32	24.4	99	75.6	131	100
パート	199	73.2	73	26.8	272	100
自営	63	73.3	23	26.7	86	100
休職中	27	79.4	7	20.6	34	100
その他	42	82.4	9	17.6	51	100
合計	1622	87.6	229	12.4	1851	100

これらのことから、本研究の対象者では、妻が有職である内、特にフルタイムで働いている家庭の父親(夫)は、夫婦関係をネガティブに捉えがちであり、妻の母親としての評価や家庭の評価がよりネガティブであるという特徴が明らかにされた。

母親は、第6因子「夫婦関係のあり方」において、昼間の養育が保育所の方が、母親(幼稚園を含む)よりも有意にネガティブであるという差がみられ、父親と同様に夫婦関係の評価がよりネガティブであるという共通の特徴がみられた。

ただし、(5)と同様に、比較分析対象者の人数が十分に得られなかったことから、今後対象人数を増やし、勤務条件、経済状態、子どもの年齢や人数など、その他の要因を含めた検討が必要であり、今後の課題としたい。

(7) 単一項目と「育児困難感」因子得点との関係

両親ともに、「子育てに悩んだときに相談する人がいる」という質問に対して「はい」とはっきり肯定できる場合に育児困難感が有意に低いという結果がみられ、父親及び母親両者にとって相談できる人が実際に存在していることが大切であることが改めて示されたといえる。

父親の子どもへのかかわりの度合については、「子どもとよく遊び、面倒見がよい」に「はい」とはっきり回答できる場合に有意差がみられていることから、よくかかわっているかどうかやはり大切なポイントであると考えられる。なお、「ややはい」ではなく、「はい」とはっきりと肯定できるかどうかポイントといえよう。

育児困難感を軽減するためには、父親が子どもの遊び相手になったり面倒をみたりして実際にかかわることが、母親のみならず父親にとっても重要であるということが出来る。

2. 母親版の重回帰分析から (表7, 表8)

母親の育児困難感の規定要因は第2因子の母親の不安・抑うつ状態と第6因子の夫婦関係のあり方であった。心身状態による影響は夫婦共通しているが夫はほぼこれだけが関連要因であり、妻は夫婦関係による影響があり、基本的な要因は夫婦関係にあると推測できるかもしれない。今後の精細な分析が必要である。

3. 父親ならびに母親の育児不安尺度(スクリーニング版)の作成(試案)

上に述べたような項目群でスクリーニング版の試案を作成した(資料)。なお、今後は乳幼児健診などの場において比較的短時間で回答を求めることができるので、これらの結果に基づきどの程度のスコアになれば育児困難感が高くフォローすべき対象となるかについては今後の課題である。ただし、経験的には各領域のスコアの育児困難感得点が上位10パーセントに入っている場合には何らかのフォローが必要であると考えている。具体的には父親の育児困難感タイプIは14点以上、タイプIIは11点以上、母親のタイプIは15点以上、タイプIIは13点以上となる(得点は最低4点から最高20点)。また、同様に父親自身の不安・抑うつは14点以上、母親は15点以上、父親の夫婦関係は13点以上、母親も同様である。これらの得点以上の場合、いずれも何らかのハイリスクな状況にあると考えて良いと思われる。それが妻だけでなく、夫もそうであるならば家庭の危機としてとらえる必要があり、子どもへの虐待等を考慮しておく必要があり、ていねいなフォローアップを要すると言って良いであろう。

子育てに悩んだときに相談できる人がいる、夫は子どもとよく遊び面倒見がよい、子どもの人数、子どもの異常の

有無、母親(妻)の周産期の異常、この5項目は育児困難感に影響を与えるハイリスク要因として面接等において考慮に入れるべき視点であるといえる。

VI. まとめ

1. 属性と父親及び母親の因子得点との関連について

- ・乳児期の子どもの評価は、両親ともに子どもの数が1人の場合が2人及び3人よりも有意にネガティブであったことから、子どもの数が複数になると比較対象ができ、乳児期についての評価が緩和される傾向が推察された。
- ・子どもの数は、1人よりも2人の方が、両親ともに育児困難感をより強く抱いていた。さらに父親は、3人、4人と数が増えるほど育児困難感タイプIIの子どもへのネガティブな感情・攻撃・衝動性をより強く抱いており、多子家庭において父子関係に留意する必要性が示唆された。
- ・子どもの異常及び母親(妻)の周産期の異常は、母親及び父親のメンタルヘルス、さらには育児や夫婦関係、家庭全体、と広くさまざまなマイナスの影響を与える可能性が示された。
- ・母親がフルタイムで仕事をしている場合には、夫婦関係や家庭についての評価がネガティブな傾向がみられたが、さらなる検討が必要である。
- ・育児困難感を軽減するためには、子育てに悩んだときに相談する人がいることや遊び相手になったり面倒をみたりして父親が子どもによくかかわることが、母親のみならず父親にとっても重要であることが示された。

2. 母親版の重回帰分析から

母親の育児困難感の発生関連要因として、「母親の不安・抑うつ状態」と「夫婦関係のあり方」が見いだされた。前者の心身状態の影響は、父親と母親の共通するところであるが、父親はこれだけが関連要因であったのに対し、母親のみに後者の夫婦関係による要因が見いだされた。これは父親と母親それぞれの育児不安心性の特徴及びそれらへの影響を与える関連要因が各々独自のものであるという推測を検証することができたといえる。

3. 父親ならびに母親の育児不安尺度(スクリーニング版)の作成(試案)

上に述べたように試案を作成した。今後、臨床的な妥当性などを考慮していく必要があるものと考えている。また、スクリーニング版ではあるが育児困難感だけに焦点を当てるのではなく、この困難感に影響を与えると考えられる2領域を加えたことで面接等においてその背景を検討するきっかけとなり得るものと考えている。

なお、父親版の育児不安に関してはこれまで母親版と表裏一体をなす形で検討してきたが、われわれが行ってきた父親・男性研究の成果が十分に反映されていない憾みがあ

り、したがってこの視点を加味した母親版にとらわれない項目構成による父親の育児不安研究の必要性を感じている。ただし、これまでの研究は今回の試案に見るような形で結実し、それなりの成果があったと考えている。今後、成案に向けてさらに検討を重ねていきたい。

謝辞 本研究をすすめるに当たりご協力いただいた各地域の小児科、保育園、幼稚園の先生方、子育てサークルのリーダーの方々、そして、お父さん、お母さんたちに深く謝意を表したい。

試案の利用について：

本論における育児支援質問紙は試案ですので、研究上はもちろんのことその他のご利用の際には日本子ども家庭総合研究所の承認を要します。また、本試案は同研究所に著作権があり今後市販する可能性があります。

文献：

- 1) 川井尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中野恵美子・恒次欽也：育児不安に関する臨床的研究－幼児の母親を対象に－。日本総合愛育研究所紀要，31集，27-42p，1995。
- 2) 川井尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中野恵美子・恒次欽也：育児不安に関する臨床的研究Ⅱ－育児不安の本態としての育児困難感について－。日本総合愛育研究所紀要，32集，29-47p，1996。
- 3) 川井尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中村敬・恒次欽也：育児不安に関する臨床的研究Ⅲ－育児困難感のアセスメント作成の試み－。日本総合愛育研究所紀要，33集，35-56p，1997。
- 4) 川井尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中村敬・谷口和加子・恒次欽也・安藤朗子：育児不安に関する臨床的研究Ⅳ－育児困難感のプロフィール評定試案－。日本子ども家庭総合研究所紀要（旧誌名日本総合愛育研究所紀要），34集，93-111，1998。
- 5) 川井尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中村敬・谷口和加子・恒次欽也・安藤朗子：育児不安に関する臨床的研究Ⅴ－育児困難感のプロフィール評定質問紙の作成－。日本子ども家庭総合研究所紀要，35集，109-143，1999。
- 6) 川井尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中村敬・谷口和加子・恒次欽也・安藤朗子：育児不安に関する臨床的研究Ⅵ－育児困難感のプロフィール評定試案－。日本子ども家庭総合研究所紀要，36集，109-143p，2000。
- 7) 川井尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・安藤朗子・中村敬・谷口和加子・佐藤紀子・恒次欽也：育児不安に関する臨床的研究Ⅶ－子ども総研・育児支援質問紙（ミレニアム版）の手引きの作成－。日本子ども家庭総合研究所紀要，37集，159-180p，2001。
- 8) 日本子ども家庭総合研究所・愛育相談所編著 母親用育児不安評定尺度「子ども総研式・育児支援質問紙」（0～11ヶ月用，1歳児用，2歳児用，3～6歳児用），「子ども総研式・育児支援質問紙の利用手引き」，2002
- 9) 川井尚他：父親・男性研究Ⅰ－父親用文章完成法（F・SCT）の作成－，日本子ども家庭総合研究所紀要，第38集，203-215，2002。
- 10) 川井尚他：父親・男性研究Ⅱ－両親の回答比較から－，日本子ども家庭総合研究所紀要，第39集，237-251，2003。
- 11) 川井尚他：父親・男性研究Ⅲ－F・SCT（父親用文章完成法）による検討－，日本子ども家庭総合研究所紀要，第40集 165-187，2004。
- 12) 川井尚他：父親・男性研究Ⅳ－M・SCT（母親用文章完成法）による検討 F・SCT（父親用）との比較を含めて－，日本子ども家庭総合研究所紀要，第41集 175-201，2005。
- 13) 川井尚他：父親・男性研究Ⅴ－父親の役割に関する基礎的研究－母親の役割とも比較して－，日本子ども家庭総合研究所紀要，第42集 177-194，2006。
- 14) 川井尚他：父親・男性研究Ⅵ－父親・夫・男性の基本的役割と今後の父親育児不安研究に向けて，日本子ども家庭総合研究所紀要，第43集 203-242，2007。
- 15) 川井尚・安藤朗子・武島春乃・永井桃子・庄司順一他：父親の育児不安に関する基礎的研究Ⅰ－今後の父親育児不安尺度作成に向けての予備的分析－日本子ども家庭総合研究所紀要，第44集 257-290，2008
- 16) 安藤朗子・川井尚・武島春乃・庄司順一・中村敬他：父親の育児不安に関する基礎的研究Ⅱ－父親育児困難感発生関連要因及び父親・母親の自由記述の比較検討－日本子ども家庭総合研究所紀要，第45集 285-294，2009
- 17) 川井尚他：育児における父親の役割Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ 厚生省心身障害研究「高齢化社会を迎えるに当たっての母子保健事業策定に関する研究」（平山宗宏主任研究者）平成元年，2年，3年度報告書，1990-1992。
- 18) 川井尚他：育児における父親の役割と保健指導に関する研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ 厚生省心身障害研究「少子化時代に対応した母子保健事業に関する研究」（日暮眞主任研究者）平成4年，5年，6年度報告書，1993-1995。
- 19) 川井尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中野恵美子・恒次欽也：育児不安に関する基礎的検討。日本総合愛育研究所紀要，30集，27-39p，1994。
- 20) 川井尚：育児における父親の役割，小児保健研究，1992;51(6):671-680
- 21) 川井尚：父親面接。心と体の健診ガイド－幼児編－。日本小児科学会・日本小児保健協会・日本小児科医会編。日本小児医事出版社。57-60。2000
- 22) 恒次欽也・庄司順一・川井尚：いわゆる育児不安に関する調査研究（1）－「育児困難感」の規定要因に関する研究－。愛知教育大学研究報告 第48輯（教育科学），123-129，1999。
- 23) 恒次欽也・庄司順一・川井尚：いわゆる育児不安に関する調査研究（2）－新資料による「育児困難感」の規定要因に関する研究－。愛知教育大学研究報告 第49輯（教育科学），123-129，2000。
- 24) 二木武監訳 ポウルビィ 母と子のアタッチメント 心の安全基地，医歯薬出版株式会社，1993

- 25) 厚生労働省 子ども・子育て応援プラン, 2005
- 26) 牧野カツコ「乳幼児をもつ母親の生活と＜育児不安＞」家庭教育研究所紀要3号, 小平記念会家庭教育研究所, 35-36, 1982
- 27) ベネッセ次世代育成研究所 第1回妊娠出産子育て基本調査・フォローアップ調査報告書(妊娠期～0歳児期), 2009
- 28) 日本子ども家庭総合研究所編 子ども資料年鑑2010, KTC中央出版, 2010
- 29) 安藤朗子・川井尚・武島春乃・庄司順一・中村敬他: 父親の育児不安に関する基礎的研究Ⅲ—母親版との比較検討—日本子ども家庭総合研究所紀要, 第46集 231-246, 2010

表7 重回帰分析 モデル要約^b

モデル	標準偏差推定値 の誤差			
	R	R2 乗	調整済み R2 乗	
1	.837 ^a	.700	.699	7.77413

表8 重回帰分析 ステップワイズ法による

係数^a

モデル		標準化されていない係数		標準化係数	t 値	有意確率
		B	標準偏差誤差	ベータ		
1	(定数)	9.306	.990		9.398	.000
	母親版2回目第1因子 夫・父親・家庭機能	-.161	.019	-.159	-8.436	.000
	母親版2回目第2因子 母親の不安・抑うつ状態	.604	.018	.650	33.985	.000
	母親版2回目第3因子 夫の不安・抑うつ状態	-.095	.021	-.077	-4.437	.000
	母親版2回目第5因子 Difficult Baby	.077	.033	.034	2.345	.019
	母親版2回目第6因子 夫婦関係のあり方	.849	.045	.404	19.073	.000
	母親版2回目第7因子 自分自身の親子関係	.040	.063	.009	.625	.532

a. 従属変数 母親版2回目第4因子 育児困難感

資料

育児支援質問紙（スクリーニング試案版）：父親用

I. 次の各項目について「はい・ややはい・ややいいえ・いいえ」のいずれかに○を付けてください。

- | | |
|----------------------------------|-------------------|
| 1. 子どものことでどうしたらよいかわからない | はい・ややはい・ややいいえ・いいえ |
| 2. 育児に自信が持てない | はい・ややはい・ややいいえ・いいえ |
| 3. どのようにしついたらよいかわからない | はい・ややはい・ややいいえ・いいえ |
| 4. 子育てに困難を感じる | はい・ややはい・ややいいえ・いいえ |
| 5. 父親として不適格とを感じる | はい・ややはい・ややいいえ・いいえ |
| 6. とめどなく叱ってしまう | はい・ややはい・ややいいえ・いいえ |
| 7. 子どもは何で叱られているかわからないのに叱ってしまう | はい・ややはい・ややいいえ・いいえ |
| 8. 子どもに八つ当たりしては反省して落ち込む | はい・ややはい・ややいいえ・いいえ |
| 9. 子どものことを許せない | はい・ややはい・ややいいえ・いいえ |
| 10. 子どもを虐待しているのではないかと思う | はい・ややはい・ややいいえ・いいえ |
| 11. 精神的に不調である | はい・ややはい・ややいいえ・いいえ |
| 12. 沈みがち | はい・ややはい・ややいいえ・いいえ |
| 13. 不安や恐怖感におそわれる | はい・ややはい・ややいいえ・いいえ |
| 14. 悲観的になりやすい | はい・ややはい・ややいいえ・いいえ |
| 15. 気が滅入る | はい・ややはい・ややいいえ・いいえ |
| 16. 妻と気持ちが通じ合っている | はい・ややはい・ややいいえ・いいえ |
| 17. 家族としてのまとまりを感じる | はい・ややはい・ややいいえ・いいえ |
| 18. 妻が落ち込んだ時に話し相手になり、話をよく聴く | はい・ややはい・ややいいえ・いいえ |
| 19. 妻が子育てに悩んでいるときは精神的に支えるようにしている | はい・ややはい・ややいいえ・いいえ |
| 20. 男として家族を守り支えとなっている | はい・ややはい・ややいいえ・いいえ |
| 21. 子育てに悩んだ時に相談できる人がいる | はい・ややはい・ややいいえ・いいえ |
| 22. 妻は子どもとよく遊び、面倒見がよい | はい・ややはい・ややいいえ・いいえ |

II. わかる範囲で次の各設問にお答えください。

[補足質問]

1. あなたの年齢 歳
2. 奥様の年齢 歳
3. ご回答の対象となったお子さんの年齢 歳
4. そのお子さんは、 人きょうだいの 番目
5. 同居しているのは

1. 妻	2. 自分が単身赴任中	3. 自分の父親	4. 自分の母親	5. 妻の父親	6. 妻の母親	7. その他 ()
------	-------------	----------	----------	---------	---------	---------------------------------
6. お子さんの昼間の主な養育者は（一つだけ○をつけてください）

1. 母親	2. 保育所	3. 幼稚園	4. 祖父母	5. その他 ()
-------	--------	--------	--------	---------------------------------
7. あなたのお仕事は（一つだけ○をつけてください）

1. フルタイム（常勤）	2. 自営	3. パート・アルバイト	4. 主夫	5. 休職中	6. その他 ()
--------------	-------	--------------	-------	--------	---------------------------------
8. これまでの奥様の妊娠、出産の状態について
 1. 妊娠中の異常があった（1. なし 2. あった）
 2. 妊娠週数が37週より早く産まれた子がいた（1. いなかった 2. いた（ ）週）
 3. 分娩中の異常があった（1. なかった 2. あった）
 4. 産褥期の異常があった（1. なかった 2. あった）
 5. 出生体重が2500g未満のお子さんがいた（1. いなかった 2. いた（ ）g）
 6. 新生児期の異常があったお子さんがいた（1. いなかった 2. いた）
 7. 生後1ヶ月以降の異常があったお子さんがいた（1. いなかった 2. いた）

育児支援質問紙（スクリーニング試案版）：母親用

I. 次の各項目について「はい・ややはいいえ・いいえ」のいずれかに○を付けてください。

- | | |
|----------------------------------|---------------|
| 1. 子どものことでどうしたらよいかわからない | はい・ややはいいえ・いいえ |
| 2. 育児に自信が持てない | はい・ややはいいえ・いいえ |
| 3. どのようにしついたらよいかわからない | はい・ややはいいえ・いいえ |
| 4. 子育てに困難を感じる | はい・ややはいいえ・いいえ |
| 5. 母親として不適格と感じる | はい・ややはいいえ・いいえ |
| 6. とめどなく叱ってしまう | はい・ややはいいえ・いいえ |
| 7. 子どもは何で叱られているかわからないのに叱ってしまう | はい・ややはいいえ・いいえ |
| 8. 子どもに八つ当たりしては反省して落ち込む | はい・ややはいいえ・いいえ |
| 9. 子どものことを許せない | はい・ややはいいえ・いいえ |
| 10. 子どもを虐待しているのではないかと思う | はい・ややはいいえ・いいえ |
| 11. 精神的に不調である | はい・ややはいいえ・いいえ |
| 12. 沈みがち | はい・ややはいいえ・いいえ |
| 13. 不安や恐怖感におそわれる | はい・ややはいいえ・いいえ |
| 14. 悲観的になりやすい | はい・ややはいいえ・いいえ |
| 15. 気が滅入る | はい・ややはいいえ・いいえ |
| 16. 夫と気持ちが通じ合っている | はい・ややはいいえ・いいえ |
| 17. 家族としてのまとまりを感じる | はい・ややはいいえ・いいえ |
| 18. 夫が落ち込んだ時に話し相手になり、話をよく聴く | はい・ややはいいえ・いいえ |
| 19. 夫が子育てに悩んでいるときは精神的に支えるようにしている | はい・ややはいいえ・いいえ |
| 20. 女として家族を守り支えとなっている | はい・ややはいいえ・いいえ |
| 21. 子育てに悩んだ時に相談できる人がいる | はい・ややはいいえ・いいえ |
| 22. 夫は子どもとよく遊び、面倒見がよい | はい・ややはいいえ・いいえ |

II. わかる範囲で次の各設問にお答えください。

[補足質問]

1. あなたの年齢 歳
2. ご主人の年齢 歳
3. ご回答の対象となったお子さんの年齢 歳
4. そのお子さんは、 人きょうだいの 番目
5. 同居しているのは
 1. 夫 2. 夫<単身赴任中> 3. 自分の父親 4. 自分の母親 5. 夫の父親 6. 夫の母親 7. その他 ()
6. お子さんの昼間の主な養育者は (一つだけ○をつけてください)
 1. 母親 2. 保育所 3. 幼稚園 4. 祖父母 5. その他 ()
7. あなたのお仕事は (一つだけ○をつけてください)
 1. 主婦 2. フルタイム (常勤) 3. パート・アルバイト 4. 自営 5. 休職中 6. その他 ()
8. これまでの妊娠、出産の状態について
 1. 妊娠中の異常があった (1. なし 2. あった)
 2. 妊娠週数が 37 週より早く産まれた子がいた (1. いなかった 2. いた () 週)
 3. 分娩中の異常があった (1. なかった 2. あった)
 4. 産褥期の異常があった (1. なかった 2. あった)
 5. 出生体重が 2500g 未満のお子さんがいた (1. いなかった 2. いた () g)
 6. 新生児期の異常があったお子さんがいた (1. いなかった 2. いた)
 7. 生後 1 ヶ月以降の異常があったお子さんがいた (1. いなかった 2. いた)

